

■ 鉄道建設を題材とした文芸書

明治5(1872)年、日本初の鉄道である新橋－横浜間鉄道の開業から、2022年に150周年を迎えます。開業以来、発展を続けている日本の鉄道。その様相をさまざまに描いた作品を、当館所蔵資料からご紹介します。



『汽笛一声』 志茂田景樹／K I B A BOOK／1997年

幕末から明治にかけての激動の時代、鉄道はどのように計画され、建設されていったのか。来航したペリーやプチャーチンらにより鉄道が伝えられてから、明治5(1872)年に日本で初めての鉄道である新橋－横浜間鉄道が開業し汽笛一声が響くまで、史実をなぞりながら、鉄道建設に携わったひとりの青年の視点を通して綴った小説。

作中には鉄道建設を先導した伊藤博文や大隈重信、イギリスの外交官ハリ－パークス、官僚で工事の責任者を務めた井上勝、指導者として多大な貢献をもたらした鉄道技術者エドモンド・モレルなど、著名人が次々と登場する。

新橋－横浜間鉄道は、東京・高輪沖と横浜・平沼の入江の2カ所で海上の築堤を線路が走り人々を驚かせたが、高島嘉右衛門や平野弥十郎らによる、この海中の埋立工事の様子も描かれている。



『クロカネの道 鉄道の父・井上勝』 江上剛／PHP研究所／2017年

長州藩士であった井上勝は、幕末に伊藤博文、井上馨らと共にイギリスへ国禁を破って密航留学する。そこで目にしたのは産業革命後のイギリスの圧倒的な技術力。なかでも井上がなにより衝撃を受けたのは、全土にわたって敷設された鉄道だった。

井上は明治元(1868)年に帰国、官僚となり、新政府の元で日本初の鉄道敷設に着手する。当初、鉄道建設はイギリスからの「お雇い外国人」たちの指導で進められていたが、井上が目指したのは日本人技術者だけの手で鉄道を敷設することだった。

新橋－横浜間鉄道に始まり、京都－大津間の逢坂山トンネルなどを手がけ、「鉄道の父」とよばれた井上の生涯をたどった小説。



『炎の旅路』 武田八洲満／中央公論社／1973年

日本初の鉄道建設を指導するため、29歳という若さでイギリスより招かれた鉄道技術者、エドモンド・モレルの日本人妻を主人公にした小説。モレルは新橋－横浜間鉄道の完成を見ることなく客死し、その妻も後を追うように亡くなった。

本書のあとがきには、「言うまでもなく、これはフィクションである。誤解を避けるため事実関係のみを言えば、エドモンド・モレルの妻は日本人であり、…私の創造した人物が、実在したこの女性にすこしでも近づいていれば…」と書かれているが、これはまったくおなじしい願いだっただ。

なぜなら、モレルの妻はハリエットというイギリス人だからであり、日本人妻という事実無根の盲説が生まれたのは、『交通新聞』1975年10月13日号が発端らしい。ただし、それが広まった背景には、モレルが死ぬまで日本の鉄道建設のために尽力したのは、「彼が日本を愛していたからだ」という妄信的な大衆心理が働いたためと想像する。

というわけで、本書はまったくのフィクションということになるが、モレルの死後、夫人が12時間後に亡くなったことは、史実として確認されている。



『「横浜」をつくった男 易聖・高島嘉右衛門の生涯』

(光文社文庫) 高木彬光/光文社/2009年

昭和54(1979)年発行の『大預言者の秘密 易聖・高島嘉右衛門の生涯』を改題・再発行した。再発行の仕掛け人である光文社のK氏は、横浜で記念イベントの同時開催を財界人らに働きかけたらしいが、高島嘉右衛門の名をだすと、けんもほろろに扱われたという。あまり知名度がないから集客につながらないと判断されたのだろうか。

高島嘉右衛門は、「高島易断」の創始者であることから、その方面では有名人だが、本書のタイトルが示す通り、横浜の社会資本整備に尽力した明治の実業家でもあった。とくに日本初の新橋-横浜間鉄道建設における平沼の入江の埋立て工事では、大規模な鉄道関連工事を初めて請負い、これを完遂したことが、建設産業史上特筆すべき事柄となった。以後、鉄道の敷設は全国に広がり、巨大で安定した建設市場が創出したことによって、近代建設企業が育まれることとなる。

本書は、ミステリーの旗手が手がけただけに、小説としての完成度も高く、高島嘉右衛門を知るための入門書として最適なので、日本の鉄道開業150周年を機に、ぜひ一読していただきたい。



『東京駅の建築家 辰野金吾伝』 東秀紀/講談社/2002年

東京駅や日本銀行本店の設計を手がけた建築家・辰野金吾の伝記的小説。

当初、「中央停車場」と呼ばれた東京駅は、東海道線の新ターミナルとして構想された。近代国家の顔となる東京駅の設計は辰野のかねてよりの念願であった。辰野は、丸ノ内に事務所を移して設計に着手。大正3(1914)年に竣工した東京駅は、開業式典も華々しく行われ、喜びをもって人々に迎えられた。しかし、当時の建築界からの評価は芳しいものではなかった。ドイツの技師バルツァーの案を基した横に長い造りは、動線が分離していて機能的とは言い難く、辰野がこだわった赤煉瓦の外壁も単なる西洋建築の物真似と受け取られたのが不評の要因のようだ。

東京駅は関東大震災には耐えたが、戦時中に空襲で罹災し、復原されて現在に至る。壮麗で力強い姿は、今も多くの人に愛され続けている。



『北海道浪漫鉄道』 田村喜子/新潮社/1986年

工部大学卒業論文の琵琶湖疏水計画が認められ、21歳という若さで琵琶湖疏水工事に工事主任として従事した天才・田邊朝郎が、明治29(1896)年に大任をおびて北海道全道1600kmの鉄道敷設に挑むノンフィクション。

著者の田村喜子は、第一回土木学会著作賞を受賞した『京都インクライン物語』や『土木のころ』でも田邊朝郎を取り上げており、思い入れがある人物と推察する。



『余部鉄橋物語』 田村喜子/新潮社/2010年

先に挙げた『北海道浪漫鉄道』と同じく、田村喜子氏の作品。

山陰本線・余部鉄橋は、地上から約41メートルの高所に架かる赤い鋼製トレスル橋で、深い渓谷にある余部の集落を通過するため、明治45(1912)年に建設された。工事には集落の人々も働き手として加わったという。

竣工後、日本海から吹きすさぶ潮風による錆から鉄橋を守るため、命がけて点検しペンキを塗り続けた「橋守り」など、余部鉄橋と共に生きた人々の姿が印象深く描かれている。余部鉄橋は、昭和61(1986)年の痛ましい列車崩落事故を経て、新橋へと架け替えられた。



『東京地下鉄』 新田潤／藝文書院／1957年

「地下鉄の父」とよばれる早川徳次（のりつぐ）が、日本初の地下鉄となる上野－浅草間（現在の銀座線の区間）を着工させるまでを描いた小説。

イギリスへの視察旅行で地下鉄を見て感激した早川は、日本にも走らせたいと発起する。交通量調査にはじまり、地質や湧水量の調査、資金繰りなど困難の連続だったが、奮闘が実り、東京地下鉄道を創立。大正14(1925)年に浅草－上野間地下鉄の起工式を迎える。この式典で、早川は熱い涙を流す。ここに東京の地下鉄建設が始まるのだった。



『地中の星』 門井慶喜／新潮社／2021年

先に挙げた『東京地下鉄』は、東京地下鉄道の創立者・早川徳次が起工式に漕ぎつけるまでを描いているが、本書では早川のほか、着工後の上野－浅草間の工事現場を舞台に工事監督たちの物語が描かれている。

この地下鉄工事は「開削工法」により行われた。作中ではこの工事の過程を輪唱に例えている。歌いだしは土留と杭打ちに始まり、覆工、掘削、残土の搬出、支保の作業が、それぞれ輪唱のように重なり合いながら進んでいく。

この区間では、現代と同じく百貨店との直結も行われた。開業日に溢れるほどの客で賑わったという。



『東京地底』 木本正次／日本経営出版会／1969年

地下鉄9号線、綾瀬－大手町間（現在の千代田線の区間）の工事を題材とした小説。この工事は「シールド工法」によって行われた。「シールド工法」とは、鋼鉄の筒の先端のカッターヘッドが回転しながら地中を掘り進めてトンネルを構築する工法で、いわば「鋼鉄のもぐら」。工事はまず、御茶ノ水のニコライ堂の脇に巨大な穴を空け、そこをシールド発進地として地底を「鋼鉄のもぐら」が掘り進めていく。そのもぐらと昼も夜も工事に従事する「もぐら人間」たちの生活が描かれる。

著者の木本正次氏の代表作には、黒部ダムを舞台とした『黒部の太陽』などがある。



『小説 丹那隧道 国鉄建設外史』 秋永芳郎／新人物往来社／1970年

「世紀の難工事」と呼ばれる丹那トンネルの掘削工事を、ひとりの作業員を主人公として描いた小説。丹那トンネルは東海道線の熱海駅と函南駅を繋ぐ鉄道トンネルとして、大正7(1918)年に着工となるも、地盤の軟弱さや大量の地下水の噴出、落盤事故などに苦しめられた。昭和9(1934)年に丹那トンネルは竣工。主人公は次に関門海底トンネルの工事に携わるが、その途中に赤紙が届き戦地へと赴く。「生きて帰って、そしてもう一度このトンネルで、泥や水と戦おう」との言葉を残して…。その遺志を継いだ息子は、新幹線用となる新丹那トンネルに挑む。



『丹那隧道』 北條秀司／大川屋書店／1943年

「吾々は丹那隧道を無心に通過する事はできない。」丹那トンネルの工事現場を舞台に、事故で亡くなった多くの犠牲者に対する哀悼の意を込め、作業員たちが生命をかけて自然と格闘する姿を描いた戯曲。あとがきによると、実際に丹那トンネルの工事に携わった人たちから話を聞くなどしてこの作品を書き上げたという。昭和17(1942)年に新橋演舞場にて前進座により上演された。



『闇を裂く道』（文春文庫） 吉村昭／文藝春秋／1990年

本書のあとがきで、著者はこう述べている。「墓参の帰途、普通電車で熱海にむかう途中、右手の沿線に立つ碑が視線をかすめ過ぎた。大正七年に起工し、十六年を費やして完工した旧丹那トンネルの殉難者の慰霊碑で、私は、ほとんど瞬間的に、このトンネル工事の経過とそれに付随した事柄を書くことをきめた」。

その一方で、少年時代に列車で初めてそのトンネルに入った時の胸のときめきが、創作意欲をいだいたきっかけとなったともいう。土木事業にかぎらず、それがもつ光と影が大きいものほど、人は惹きつけられるのだろう。

そのことを象徴するように、著者は本書の序盤で早くも一つの山場をもうける。それは大正10(1921)年4月1日に東坑口から約300m付近で起こった落盤事故であり、悲惨な出来事にもかかわらず、工事主任だった飯田清太をはじめ、17人の奇跡の生還で知られている。吉村はこの事故に、本書の約四分の一に相当する100ページ以上を費やすのだ。

史料を丹念に調べる著者ならではの、緻密かつ迫真の描写で東海道本線のボトルネックを解消した丹那トンネル建設工事の光と影を追う。



『青函隧道』（小学館ライブラリー） 三田英彬／小学館／1999年

丹那トンネルと双璧をなす、日本鉄道トンネル史上のビッグプロジェクト・青函トンネル建設工事を描くノンフィクション。物語は昭和28(1953)年の地質調査再開から、昭和58(1983)年の先進導坑貫通までを、長く現場で指揮をとった吹石を主人公に追う。

登場人物とその人間関係は、読者の興味を惹くためにフィクション化したが、建設工事に関わること一切は、すべて事実であり、真相の展開であると、著者が言い切るだけあり、長期にわたる綿密な取材と調査が偲ばれる力作であることは間違いない。

ただし、リアルを追求したあまりに、純粋に青函トンネル建設物語を楽しみたいという方だと、文字を追うのが途中で億劫になってしまうかもしれない。そのような場合には、当館所蔵のDVD『プロジェクトX 挑戦者たち：友の死を越えて 青函トンネル・24年の大工事』をお勧めしたい。こちらは泣ける脚色満載だ。



『新幹線用地屋奮戦記』 佐村芳之／東京書房／1965年

夢の超特急・東海道新幹線の建設予定地を買収するため、国鉄の用地買収係として5年間勤務した著者。交渉相手は、地元民で構成された対策委員会はもちろん、住職、神主、山師、土地ドロボー、困われ妻、浮浪者と多彩な顔触れで、補償金を1円でも多くとるため、あの手この手の策を弄し、なかなか手ごわく、そしてどこかユニークだ。時にタダ酒をねだられ、時に風呂場覗きの出歯亀と間違われ刑事にこづかれる…悪戦苦闘・悲喜こもごものショートショート風エピソード集。

読了後、新幹線に乗車するたびに、住み慣れた土地を提供した5万人もの人々と、用地買収のために奔走した著者たちに想いを馳せることになるのは必定だ。



『上越新幹線 トンネルと豪雪に挑む男たち』 萩原良彦／新潮社／1983年

大宮-新潟間をつなぐ上越新幹線は「モグラ列車」と呼ばれたほど、多くのトンネルが建設された。大清水トンネルの火災事故、中山トンネルの異常出水、榛名山麓の陥没事故、豪雪との闘い…。昭和46(1971)年に着工となった工事は難航をかさねた。

取材に基づき、実際の現場写真も織り交ぜながら、上越新幹線の建設工事をドラマチックに描き出す。



『軌道 福知山線脱線事故 JR西日本を変えた闘い』（新潮文庫）

松本創／新潮社／2021年

平成17(2005)年4月に起こった福知山線脱線事故。死亡者107人という大事故で妻と妹を失った浅野弥三は、遺族の一人として、また都市計画コンサルタントとしてJR西日本との闘いを始めた。

「あんたたちの会社を責めようというんじゃない。むしろ、あんたたちの会社をよくするためにやるんだ」

これまで鉄道業界に根強くあった「ヒューマンエラーが最大の原因である」という責任追及型の考えから、「ヒューマンエラーはシステムと人間の不調和、人間の特性や諸々の環境条件から起こった結果であり、原因ではない」という原因追求型の考えへ。JR西日本の企業体質を変えた闘いの経緯を追い、安全に「絶対」はなく、「不断の努力」を続けていくしかないことを提言する本田靖春ノンフィクション賞受賞作。



『線路工手の唄が聞えた』（文春文庫） 橋本克彦／文藝春秋／1986年

子ども時代を線路の近くで過ごした著者が、いつのころから、ふと聞こえなくなった「線路工手の唄」の行方をもとめ、生涯を線路で働き続けた男たちに出会う旅にてたルポルタージュ。第15回大宅壮一ノンフィクション賞受賞作。

巻末の付録には、全国各鉄道管理局の線路工夫たちの間で唄われた「道床搗き固め音頭」の歌詞が収録されている。



『小説 泰緬鉄道』 清水寥人／毎日新聞社／1968年

太平洋戦時中にビルマ（現・ミャンマー）戦線の陸上補給路を確保するため、日本軍によって敷設されたタイ・ビルマ間を結ぶ泰緬鉄道建設工事の一部始終を描いた小説。

映画『戦場にかかる橋』は、この泰緬鉄道のクウェー川橋梁建設捕虜強制労働をテーマとしているが、「サル、ゴリラ、チンパンジ〜♪」の替え歌で有名な「クワイ河マーチ」の軽妙な音楽とは裏腹に、あまりにも悲惨で救いがない内容なので、観たことを後悔した記憶がある。

映画の原作者であるフランス人小説家ピエール・ブールは、戦時中に日本軍の捕虜となった体験を踏まえて『戦場にかかる橋』を執筆したらしいが、本作の著者は日本軍の鉄道軍属として建設に従事した人物なので、映画とはまた違った視点で建設の全容が描かれている。



『人喰鉄道』（旺文社文庫） 戸川幸夫／旺文社／1976年

19世紀末に開始されたアフリカ動脈鉄道建設。その工事に従事する人々を人喰ライオンが襲った。ライオンの襲撃は回数を重ねるごとに巧妙で残忍なものとなる。しかも困難な問題は、それだけではなかった…。

青年技師バターソンを主人公に、あまりにも苛酷な自然条件と数々の苦難に打ち勝った人々を描く、実際におきた事件をもとにした創作小説。著者は動物文学の第一人者だけに、ライオンの心理描写（手塚マンガのような極端に擬人化されたものではない）も描かれており、物語に深みを与えている。

ちなみに本書が取り上げたツァボの人喰ライオン事件は、平成8(1996)年に「ゴースト&ダークネス」というタイトルでパニック映画化されている。



『若桜鉄道うぐいす駅』（徳間文庫） 門井慶喜／徳間書店／2014年

若桜鉄道のうぐいす駅は、病院誘致のため取り壊される計画が持ち上がっていた。しかし、この駅舎はフランク・ロイド・ライトの設計という噂があり、保存を求める運動が巻き起こっていた。解体推進派の村長である芹山豪造と、反対派の三ノ輪重次郎は幼馴染だが、うぐいす駅解体をめぐる袂を分かった状態だ。豪造の孫である大学院生の芹山涼太は、豪造と重次郎それぞれから、有利になるようなうぐいす駅の歴史を調べると依頼される。しかし、そんなおりに豪造が急死し、涼太は村長選に立候補させられてしまい…。平易な文章でスラスラとよめるライトノベル風・青春ミステリー。

著者の門井慶喜氏は『銀河鉄道の父』で平成30(2018)年に直木賞を受賞、『家康、江戸を建てる』、『東京、はじまる』、『地中の星』（前掲）など、建設関係の小説も多く手がけている。



『開化鐵道探偵』 山本巧次／東京創元社／2017年

明治12(1879)年、京都―大津間の逢坂山トンネルの鉄道工事現場で不審な事件が相次ぐ。局長の井上勝は元八丁堀同心の草壁に事件の調査を依頼する。草壁が逢坂山の現場に到着してまもなく、仮開業した最寄り駅から京都に向かった工事関係者が転落死したという報せが入り…。草壁と工部省鉄道局の技手見習である小野寺のコンビがこの事件の謎に挑む。

本作はフィクションだが、当時の鉄道建設の様相が物語の下敷きとなっている。著者の山本巧次氏は子供の頃から鉄道が好きで、鉄道会社に30年余り勤務していたという経歴を持つ。鉄道を題材としたミステリーは数あれ、鉄道黎明期の工事現場を舞台とする作品は珍しい。鉄道好きによるちょっとマニアックな鉄道ミステリー。



『電車告知人 明治の京都を駆け抜けた少年たち』 鳥越一朗／ユニプラ／2007年

少年が見つけた「電車告知人」の求人広告。条件は「足に自信のある」こと。

明治28(1895)年、京電(京都電気鉄道)は日本で初めてとなる市街電車の営業を開始した。この電車の先を走り、「危のおっせー、電車が来まっせー」と叫びながら往来の人々に注意喚起するのが「電車告知人」の仕事だった。半纏を羽織り、夜も提灯を下げて京都の街を走る。電車に轢かれて死亡したり、手足切断の事故があったというこの危険な仕事は、明治37(1904)年に全面廃止となるまで存在した。「電車告知人」に採用された少年は、仕事の最中にロシアの少女と出会う。近代化する当時の京都の情景も描かれた青春小説。



『信長鉄道』（ハルキ文庫） 豊田巧／角川春樹事務所／2021年

昭和62年3月31日23時59分50秒、国鉄分割民営化のカウンタダウンが始まる中、国鉄名古屋工場の分割反対派職員10名は、工場設備と一緒に永禄3年にタイムスリップしてしまう。そこは桶狭間の戦い直前の尾張であった…。

あとはタイトルから、おおよその展開が想像できるだろうと思う。はるか昔の映画『戦国自衛隊』のオマージュのような作品で、著者もそれを意識してか、文中で若干ほのめかしている。



『電車道』 磯崎憲一郎／新潮社／2015年

「橋を架け山を切り開き、北から南まで網の目のように線路を張り巡らせて、四六時中ひっきりなしに電車を走らせよう」

突然に家を出て洞窟に棲みつき、やがて私立学校の校長になった男と、銀行員を辞めて鉄道会社を設立した男の物語を軸に、鉄道が敷設されてゆく郊外の街に流れる百年の時間を描いた小説。

